HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シャルル・フーリエの「愛の新世界」と資産配分
Author(s)	大塚, 昇三
Citation	經濟學研究, 39(4), 108-123
Issue Date	1990-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31843
Type	bulletin (article)
File Information	39(4)_P108-123.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 39-4
北海道大学 1990. 3

シャルル・フーリエの「愛の新世界」と資産配分

大塚昇三

はじめに

シャルル・フーリエには，人びとの道徳的不評をおそれてみずから公表を控えた「性愛」にかんする論述がある[1]。現在のわれわれは，1967年に初めて公刊された草稿集『愛の新世界』によってその内容を知ることができる[2]。また，フーリエの主著『普遍統一の理論』には，その「性愛」にかんする論述の削除の痕跡が残されており[3]，それによってわれわれはフーリエがどのような文脈でその性愛論を展開しようとしていたのかを正確に知ることができる。本稿は，フーリエのこうした性愛論の意義を，それが『普遍統一の理論』で展開されるはずであった文脈にそって明らかにすることを目的とする。そこでまず，その文脈をフーリエの思想体系の枠組を念頭におきながら簡単にみておこう。

フーリエの構想した「ファランジュ」という共同社会では経済的不平等が不可欠とされ，その格差は大きければ大きいほどよいとされる。他方，フーリエは，「富裕階級」による資産の一部ないし所得の一部の「貧困階級」への贈与をファランジュにおける分配のかなめにしていた。というのはこの贈与が貧困階級の人びとの富裕階級の人びとにたいする感謝にみちた熱狂を喚起し，この熱狂が経済的不平等に起因する貧困階級の富裕階級への不満を解消するばかりか，ひいては富裕階級の利益につながる貧困階級の労働意欲をもかきたてる，とフーリエは考えていたからである。とすると当然，不平等の格差が大きければ大きいほど，こうした贈与の貧困階級にとっての重みはまして，その熱狂を

1）最近，ビーチャーが詳細なフーリエ研究を著しているが，彼はそのなかで，フーリエが，みずから「性愛」論の公表を手控えた経緯を，フーリエと彼の最初の弟子のミュイロンとの書簡にもとづいて描いている。Beecher, J., *Charles Fourier*, University of California press, 1985, p. 173. ただしビーチャーの依拠している書簡は，フーリエの弟子ペラランの著した伝記に掲載されているものである。なお「性愛」の原語は“amour”であるが，本稿ではこの“amour”に適宜，「性愛」，「愛」，「恋愛」といった訳語をあてている。ちなみに本稿で「愛情」と訳しているのは“affection”であって“amour”と区別している。

2）Fourier, *Le nouveau monde amoureux*, (*Oeuvres complètes de Charles Fourier*, édition anthropos, Paris, t. VII, 1967.)［以下，この著作を N. M. A. と略記する。］なお，本稿でもちいたフーリエのテクストはすべてこのアントロポ版の全集による。またテクストの引用にかんして若干言及しておく必要がある。フーリエはその思想体系の全体を主要著作のおのおののなかで反復して説明している。その反復される内容はまったく同じではなく，項目ごとに主要著作を検討してみると，それらは相互に補完的なかたちになっている。そしてある項目にかんして論じる場合，それについてもっとも明快な箇所を引用した。その結果，引用が複数の著作にまたがることも生じている。ただしそのような場合でもテクストの文脈にそって引用されていることにかわりはない。

3）Fourier, *Théorie de l'unité universelle*, Paris, Libraire Sociétaire, 1841-43. (*Oeuvres complètes*, t, V),［以下，この著作を U. U. と略記し，この著作にかんするかぎり全集の巻数をその都度示していく。］pp. 461-470. なお，この著作は *Traité de l'association domestique-agricole*, (Paris et Londre, 1822,) を増補改訂したものである。

喚起する効果は大きくなるはずである。フーリエが経済的不平等をファランジュに不可欠とするのにはこうした理由があったのである[4]。フーリエは富裕階級による貧困階級の利用という問題を提起していたのである[5]。

だが，富裕階級が貧困階級を利用するといっても，それはフーリエの構想した社会システムのもたらす結果であって，そこではかならずしも富裕階級が貧困階級を意図的に利用すると主張していたわけではない。フーリエはここである種の「幻想」の働きを考えているのである。彼は社会機構をいわば一種の幻想醸成装置とみなし，そのなかで富裕階級であれ貧困階級であれ人びとがみな同じ幻想に酔うようにこの装置をプログラムしているのである。さきに指摘した贈与もこの幻想に則っておこなわれる。つまり，富裕階級が貧困階級に資産の一部ないし所得の一部を贈与するとき，富裕階級は貧困階級を利用するために甘い汁をすわせるといった計算にもとづいてそうするのではなく，あくまでも同じ幻想に酔う同胞に，贈与したくて贈与する，ということなのである。フーリエはこの幻想醸成装置を「労働」部門にかんして綿密に組み立てた。それは「労働」を介して富裕階級と貧困階級の人びとのあいだに血のつながった家族なみの連帯感の幻想を醸成することをめざしていた。そこで富裕階級を貧困階級とともに労働させるために，「労働」が「快楽」になるよう「労働」を組織することが重視されていた。フーリエはこうして醸成された幻想にもとづいてなされる富裕者から貧者への資産の遺贈を「分散相続」とよんでいたのである[6]。

ところでフーリエは，「労働」とならんでもうひとつの部門，すなわち「性愛」の部門においても同じような幻想醸成装置を組み立てていた。それが『愛の新世界』で展開されている性愛論の内容に他ならない。その装置は「性愛」を介して富裕階級と貧困階級の人びとのあいだに「男女の共有」という幻想を醸成することをめざす。そこでは富裕階級の人びとに貧困階級の人びとと性的関係をもたせるために「自由恋愛」が組織化され，一夫一婦制を多婚制に改変することが最重視される。そして「労働」を介した場合と同様，「男女の共有」幻想にもとづ

4）U. U.，(*Oeuvres complètes*, t. V,) pp. 510-511. なお，フーリエによれば，未来社会の構成単位として「ファランジュ」とよばれるある種の自給自足的共同体が株式会社の形態で構想され，その共同体の成員はみなこのファランジュの株主となる。そしてこの共同体内部の経済的不平等はその成員の保有株式数によって表現される。詳しくは拙稿「シャルル・フーリエと階級調和の方策—「資本」の分配を中心に—」参照。(北大経済学研究　第37巻　第2号，1987年)

5）ヴィルフレード・パレートの『社会主義諸体系』のなかにシャルル・フーリエの体系についてのつぎのような記述がみられる。すなわち「社会主義的ユートピアの著述家たちのあいだでフーリエは特別の地位を占める。フーリエはながながとひとつの構想を展開している。もっともそれは他の著述家たちにおいてすでに胚種としてみいだされるのだが。その構想とはすなわち，社会不適応者を淘汰するかわりに利用することが重要である，ということである。この考えは天才的であり，この観点からフーリエの体系は科学的諸体系のなかに位置付けられるべきなのである。」(Pareto, V., *Les systèmes socialistes*, (*Oeuvres complètes*, t. V, Genève, 1965,) t. II, p. 149.)

パレートは，人類という種が維持されるのは「人間の淘汰」によるとするのだが (*ibid.*, p. 130.)，フーリエ以外の他の社会主義的ユートピアの著述家たち，たとえばサン・シモン派の人びと，ロバート・オーウェン，ピエール・ルルー，等などの諸学説の目的は，すべての人びとを環境へ適応させることであった。それにたいしてフーリエの目的は社会不適応者を利用することだとパレートは評価しているのである。けれども彼は，こうしたフーリエ評価の論拠をかならずしも明確に提示しているわけではない。ちなみにパレートは，これとは別の箇所で，フーリエの情念論すなわち情念を利用するための情念の分析に着目してはいるものの，それも彼のこうしたフーリエ評価の論拠としてはかならずしも十分なものではない (*ibid.*, p. 265.)。それにしても，パレートのいう「社会不適応者」をフーリエのいう「貧困階級」によみかえてみると，パレートはすでに，フーリエの提起していた富裕階級による貧困階級の利用という問題を的確にとらえていたといえよう。

6）U. U.，(*Oeuvres complètes*, t. V,) pp. 444-461, cf. *ibid.*, p. 377 sq.

いた「分散相続」が提起されていたのである[7]。フーリエがその「性愛」論の展開を手控えたのは，じつはこのような「分散相続」の主張を含む内容であった。従来のフーリエ研究では，この「労働」部門にかんしては詳細に論じられてきたが，「性愛」部門にかんする取り組みはほとんどみられない[8]。

そこで本稿では，上記の文脈をふまえて，この「性愛」部門すなわち「男女の共有」の幻想が醸成される仕組みと，それにもとづいた富裕階級の貧困階級への資産の贈与のありかたを明らかにしてみたい。それを解明するための準備としてまず，人間の「情念」の分類と，それにもとづいてなされる性格の類型化を検討しておかねばならない。フーリエは人間の情念を欲望ないし欲求とほぼ同義にもちいている。そしてその情念をまず3つに区分し，さらにそれらを12に細分する。しかし他方で情念を「魂に由来するもの」と「肉体に由来するもの」に二分したりしており，それはかならずしも明快な分類とはいえない。しかしいずれにせよこのように分類した情念のシステマティックな組み合わせによってフーリエは人間の性格類型を定義しているのである。さらにこのように定義された性格の持主のあいだの「共感」の成立が検討される。こうしてパズルのように組み立てられていく性格類型を第1節で検討する。第2節では，フーリエが「自由恋愛」ないし「多婚」の胚種として着目する文明社会の間男の慣習およびある種の乱行パーティーをまず批判的に検討し，フーリエのめざす多婚の基礎になるいくつかの愛の形態を確定する。それをふまえて，第1節で明らかにした性格類型にもとづいて「共感」が成立しやすいように組織されていく「多婚」の具体的なあり方を明らかにする。第3節では，こうした「多婚」が「聖なるもの」に接続される回路を検討し，しかるのちに多婚を実施する人びとのあいだに「男女の共有」の幻想が醸成されることをみる。そして最後にこの幻想にもとづく富裕者の貧者への遺産の分与のあり方をみる。

I. 情念と性格類型

フーリエは人間の性格分析を彼独自の情念の分類・区分にもとづいて展開している。そこでまず，これらの分類がもっともよく整理されたかたちで示されている『産業的組合的新世界』[9]に依拠しつつ，フーリエの情念論から簡単にみていこう。

はじめにフーリエの情念論の特徴を二つ指摘しておくと，ひとつは，情念は欲望ないし欲求とほぼ同義にもちいられており，欲望対象ないし欲求対象の差異によって分類されるということ，もうひとつは，情念は，欲望ないし欲求の対象へむかうある作用力としてとらえられるということである。フーリエはこの作用力を「情念引力」とよぶ。彼によれば「情念引力とは，熟慮反省にさきだって自然によってもたらされ，理性や義務や偏見等などの反対にもかかわらず，いつまでも存続する衝動である」[10]。

7) N. M. A., pp. 272-282, また『愛の新世界』に次のような記述がみられる。「社会進歩に関連して，闘うべき二種類の偏見がある。まず長調の偏見，それはアソシアシオンのかわりに不統一な労働の慣習に，情念系列の経済性とまったく正反対の所帯の労働の慣習に執着する偏見である。しかしこの偏見は，短調の偏見ほど根深いものではなく，また闘いにくいものではない。その短調の偏見とは，迷信にささえられた恋愛の偏見である。これこそ恋愛機構の理論について私がいっそう力説する理由である」(*ibid.*, p. 444.)。なお「アソシアシオン」ないし「情念系列」については前掲論文「シャルル・フーリエと共同性」参照。cf. U. U., (*Oeuvres complètes*, t. V,) pp. 461-470.

8) ビーチャーもフーリエの性愛論への立ち入った分析はおこなっていない。

9) Fourier, *Le nouveau monde industriel et sociétaire*, Paris, 1829, (*Oeuvres complètes*, t. VI.)［以下，この著作はN. M. と略記する。］

10) N. M., p. 47, 田中正人訳，『産業的共同社会的新世界』，『オーウェン，サン・シモン，フーリエ』，中公世界の名著，第42巻，1975年，所収，495ページ。なお，ここに収められているのは部分訳で

つぎに情念の分類・区分をみていこう。フーリエは情念のめざす目的，つまり欲望ないし欲求の対象をまず三つあげている。

第1に五感の対象，

第2に集団ないし愛情の絆，

第3に情念の調和。

これらの対象の区分におうじた情念をフーリエはそれぞれ「感覚情念」，「集団情念」，「配分情念」とよぶ。つまり感覚情念は物質的ないし肉体的な欲求の充足をめざし，集団情念は精神的ないし魂の欲求の充足をめざし，配分情念はこれら二つの欲求のバランスをとりながら，たえずそれらの欲求を維持ないし喚起していくことそれ自体をめざす，ということである。なおフーリエは「集団情念」と「配分情念」とを魂に由来する情念とし，「感覚情念」を肉体に由来する情念としている。

「感覚情念」はさらに「味覚」，「触覚」，「視覚」，「聴覚」，「嗅覚」の5つの情念に細分される。「集団情念」はそれがめざす愛情の絆の種類におうじて「友情」，「野心」ないし「名誉心」，「恋愛」，「父性愛」の4つの情念に細分される。「配分情念」は「陰謀情念」，「蝶蝶情念」，「複合情念」の3つの情念に細分される。「陰謀情念」は「党派精神」であって陰謀を欲求対象とする「陰謀の奇癖 (la manie de l'intrigue)」である。「蝶蝶情念」は「享楽を変化させる欲求，快楽から快楽へ飛び回る欲求」つまり快楽の多様性を欲求対象とする情念である。「複合情念」は「二つの快楽を同時に味わう欲求」すなわち「感覚情念」と「集団情念」との同時充足をめざす情念であり，「その二つの快楽の混合が陶酔を高揚にまでたかめる」。ただし陰謀情念，蝶蝶情念，複合情念のそれぞれの充足がどのように情念調和につうじるかということについてはここではふれない[11]。

そしてフーリエは，これらの12情念のすべてが同時的にめざす目的として「統一性 (l'Unitéisme)」をあげて，それをつぎのように定義している。「統一性とは，個人が自分の幸福を周囲のすべての人の幸福に，今日かくも憎しみあっている全人類の幸福に一致させようとする傾向である」。それは「かぎりない博愛」であり，「普遍の厚意」であると。また逆に，これらの情念のいずれかが抑圧されると，全情念はこの「統一性」の指向から，一転して「利己主義」をめざす「対立情念」になるという。フーリエはこの対立情念を「すべてをわれわれ個個人の都合に従属させる奇癖」と定義している。とはいえのちに詳しくみるように，フーリエはこの「利己主義」を生かしながら「統一性」を具現していく巧妙なシステムを構想していくのである[12]。

以上，人間の情念の「感覚情念」，「集団情念」，「配分情念」の3区分とそのそれぞれを細分してえられる合計12の区分が，その全著作をつうじてフーリエが用いている情念区分である[13]。

ここで，この情念論において必ずしも明確とはいえない区分，すなわち魂と肉体ないし精神的なものと物質的なものの区分について言及しておこう。これはのちに見るようにフーリエの論理展開に不可欠な区分なのである。さきにみた区分によれば「感覚情念」は肉体ないし物質

あって，引用箇所が訳出されている場合にのみ，訳文のページ数を記しておいた。ただし訳はかならずしもこれによっていない。以下同様。

11) N. M., pp. 47-51, 69-70, 72-75, 訳, 495-500, 504-505, 508-511ページ。cf. U. U., (*Oeuvres complètes*, t. II), p. 144.

12) Fourier, *Théorie des quatre mouevments et des destinées générales*, Leipzig [Lyon], 1808, (*Oeuvres complètes*, t. I), [以下，この著作を Q. M. と略記する。] pp. 79-80. 巌谷國士訳，『四運動の理論』，現代思潮社，1970年，上，140-142ページ。

13) このような数字の客観的な根拠は不明である。ちなみに巌谷氏は，「7と12は本質的に統一の数であり，とりわけ聖なる数である，なぜなら7は三位一体と四位一体との合計であり，12はその倍数だからである。すなわち3と4とは聖なる単一数であり，7と12は聖なる複合数である，云々」(U. U., (*Oeuvres complètes*, t. III,) p. 190.) というフーリエの言明を論拠に，彼の「素朴な聖教信仰」を指摘している。巌谷國士『幻視者たち—宇宙論的考察』河出書房新社，1976年，116ページ。

的なものにかんする情念であり，「集団情念」は魂ないし精神的なものにかんする情念である。しかしながら「集団情念」は精神的なものだけでなく物質的なものにもおおいに関係している。事実，フーリエはさきの分類との整合性を顧慮することなしに，「集団情念」を「長調」情念と「短調」情念とに区別する。「長調と短調の違いは，肉体と魂とよばれる物質的なものと精神的なものとの二つの原理の感応力に起因する。」つまり精神的なものの支配的な情念が「長調」情念であり，物質的なものの支配的な情念が「短調」情念なのである。そして「友情」情念と「野心」情念とは「長調」情念に，「恋愛」情念と「家族」情念とは「短調」情念に分類される[14]。

「長調」情念 ｛「友情」情念
　　「野心」情念

「短調」情念 ｛「恋愛」情念
　　「家族」情念

フーリエは「集団情念」のめざす4種の集団をつぎのように分析している。すなわち「家族」情念は断ち切ることのできない「血のつながり」という「物質的なもののくびきのもとにしっかりとつながれている家族集団」をめざす。「恋愛」情念のめざす「恋愛の集団は，どんなに強く物質的な原理に服従していても，この原理の奴隷ではない。恋愛の絆にかんしてはしばしば精神的原理が支配的になる。たとえば人びとがある美しい恋人のもとを去って，美しくはない女性をとる場合，その女性の精神ないし気品があなたを魅了したのである。」したがって「家族」情念と「恋愛」情念とは「短調」情念に分類されるのだが，前者のほうがより肉体的なものの支配をうけるのである。他方，「野心」情念のめざす「野心の集団ないし団体の絆は支配的なものとして名誉と利得をもつ。それは富すなわち産業的素材によって影響される。これは肉体的なものよりも高貴である。」また「友情」情念がめざす「友情の集団はほとんどまったく物質的なものから解放されている。」こうして「野心」情念と「友情」情念とは「長調」情念に分類されるのだが，後者のほうがより精神的なものの支配をうけるのである。またこの分析から明らかなように「野心」と「恋愛」の二つの情念のめざす集団は「物質的原理と精神的原理の二つの原理を直接均衡させながら展開し，魂と肉体の動力の釣り合いを維持する特質をもつ」。そこでフーリエはこのふたつの情念のそれぞれを「超長調」情念，「超短調」情念とよび，精神と肉体の結び目となる情念として重視する。[15]

このように，さきにみた区分では，魂ないし精神的なものに関係するはずの4つの「集団情念」が，ここでは肉体ないし物質的なものと魂ないし精神的なものとの両者に関与しているのである。つまり魂と肉体の区別，精神的なものと物質的なものの区別がこの「集団情念」の内部でおこなわれ，この4つの情念のなかで，魂の原理と肉体の原理とがせめぎあっている。したがって「集団情念」は魂と肉体の区別にもとづく情念区分がうすれ両義的な情念といえよう。

さて，フーリエはこのように区分される12の情念を組み合わせることによって人間の性格を類型化している。そこでつぎにフーリエがこの情念論にもとづいて展開している性格類型を検討しよう。

フーリエは情念と性格との関係についてつぎのようにのべている。「12の根情念は多くの色合いに細分され，それが多かれ少なかれ各個人の主調となる。そこから無限に多様な性格が生まれるが，それでも810の主要な性格に帰することができる。自然はそれらを手当り次第に両性の子供のあいだに配分する。それゆえ810人の子供を無差別に選んで集めてみると，そこには人間精神の到達しうるあらゆる性格の胚種が見いだされる。」つまり810の個体をランダムに

14) N. M., pp. 96-97.

15) *Loc. cit.*, cf. N. M. A., pp. 440-441.

［表1］「性格の一般階梯ないし一般音階」[17]

音階	性格類型	各類型の固体数	情念組成
ド	単一性格	576	1　何らかの支配的情念,
#, ♭,	混合	80	1　魂の情念, 1　感覚情念
レ	2重性格	96	2　魂の情念
#. ♭,	2重混合	16	1　魂の情念, 2　感覚情念
ミ	3重性格	24	3　魂の情念
ファ	4重性格	8	4　魂の情念
#. ♭,	3重混合	8	2　魂の情念, 3　感覚情念
ソ	5重性格	2	5　魂の情念
		合計 810	

［表2］「超越的性格」一覧表[19]

音階	性格類型	情念組成
#. ♭,	4重混合	2　魂の情念, 4　感覚情念
ラ	6重性格	6　魂の情念
#. ♭,	5重混合	2　魂の情念, 5　感覚情念
シ	7重性格	6　魂の情念, 1　感覚情念
ド	全性格	7　魂の情念

抽出すれば，それで810の性格がほぼ網羅されるというわけである[16]。フーリエはこの810の性格の内訳を「性格の一般階梯ないし一般音階」として上のような一覧表で示している［表1参照］。左端の音階の列はフーリエがよくもちいる分類項目の比喩的名称である。ここではまず全音と半音をふくめて全部で8つの性格が区別されている。たとえば「単一性格」とは12情念のうちのいずれかの情念を「支配的情念」としてもつ性格である。その個体数は576である。ただしこのうちの多くが「恋愛」,「野心」,「味覚」の情念を「支配的情念」としてもつことが指摘されている。「混合」とは魂に由来する7情念のうちの1つと肉体に由来する5情念のうちの1つとを支配的情念としてもつ性格である。その個体数は80である。以下同様に「5重性格」まで表のように規定される。したがって「性格」は基本的には「単一性格」から「5重性格」まで大きく8種に分類され，それらがそれぞれ810の性格に細分されることがわかる[18]。しかし性格の種類はこれだけにとどまらない。さらに「超越的性格」として「4重混合」から「6重性格」そして「全性格」にいたるまで上のように規定されている［表2参照］。さきの「一般音階」とこの「超越的性格」の情念組成をみると，「7重性格」をのぞく「多重性格」の「支配的情念」はみな「魂の情念」であることがわかる。フーリエは「性格」の音階が高くなっていくにしたがってその「性格」は才気煥発になり，洗練されていくと考えている。たとえば「単一性格」の持主は「ほとんどその嗜好をかえることがなく，長時間の仕事にむく能力をもつ。彼らは性格の階梯において，連隊における単なる兵隊のようなものである」。それにたいして「2重性格」は「男であれ女であれ，連隊長に匹敵する」。そしてヴォルテールのような才人は「5重性格」，ボナパルトは「6重性格」，シーザーとなると「7重性格」とみなされ

16) Q. M., pp. 83-84, 訳, 上, 148ページ。
17) N. M., pp. 340-341.
18) ちなみにこの810の個体数の男女比は415対395である (N. M. A., p. 459.)。なおこの比率はフーリエが「自然」の出生率の構成比とする男21人にたいし女20人の比率に符合している (*ibid.*, p. 456.)。
19) N. M., pp. 341-342.

［表3］「超越的性格」の出現頻度一覧表[22]

ソ	5	低位微分	K 移行部	810人のうち4カップル
			第1段階	810人のうち1カップル
			第2段階	2430人のうち1カップル
			第3段階	9720人のうち1カップル
ラ	6	中位微分	第4段階	29160人のうち1カップル
シ	7		第5段階	116640人のうち1カップル
ド	8		第6段階	349920人のうち1カップル
			第7段階	1399692人のうち1カップル
レ	6	高位微分	X1 第8全性格	4198076人のうち1カップル
ミ	10		X2 第9全性格	16792304人のうち1カップル
ファ	11		X3 第10全性格	50376912人のうち1カップル
ソ	12		X4 第11全性格	201519648人のうち1カップル
			X5 第12全性格	604558944人のうち1カップル
			Z 5全性格	2418235776人のうち1カップル

るのである。ちなみにフーリエは「2重性格」から「全性格」までの全音階の性格を一括して「多重性格」ともよぶ[20]。

他方，この「超越的性格」の個体数については少し説明を要する。さきの810の性格にかんしては810の個体をランダムに抽出することによって一覧表にすることができたが，この「4重混合」から「全性格」までの性格はその出現頻度が格段に低くなっていくのである。その具体的な数字は，フーリエが「微分情念論」において提示している上の一覧表によって知ることができる［表3参照］[21]。ただしここでは「超越的性格」がさらに細かく区分されている。この表の最初の行の「K　移行部　810人のうち4カップル」はすでにみた「性格の一般階梯ないし一般音階」の「3重混合」に，そして第2行の「ソ5　第1段階　810人のうち1カップル」は同じく「性格の一般階梯ないし一般音階」の最後の「5重性格」に対応している。したがって「超越的性格」の「4重混合」から「全性格」までの高い段階の性格，すなわち「嬰ソ音」から「ド音」までが，この一覧表の「第2段階」ないし「第3段階」から「第6段階」ないし「第7段階」に対応している。ちなみにこの一覧表を見ると「超越的性格」が1オクターヴを越えて規定されていることがわかる。24億人に2人というきわめて出現頻度の低い性格までも規定されているのである。ただしこれらの数字の根拠についてもまったく不明である。

以上が，フーリエの性格分析の骨子である。

ところで，フーリエはこのように分類され，段階づけられた性格をもつ人びとのあいだには規則的なかたちで「共感」が成立すると考えている。フーリエの共感論はきわめて多岐にわたり，その全体をここで論じることはできないが，性格論に関係する側面についてだけ簡単に

20) *Ibid.*, pp. 340-344.

21) フーリエは『普遍統一の理論』における「性格」論のなかで「超越的性格」にかんして「微分情念論」における「奇怪な嗜好の累進階梯」表を参照せよとの指示をあたえている（U. U.,（*Oeuvres complètes*, t. V), pp. 439-440.）。ただしこの表は「奇怪な嗜好」にかんするものであって，12情念のうちの「感覚情念」の「味覚」にかんする「微分情念」の一覧表である。なお，『普遍統一の理論』第4巻で展開されている「微分情念論」(U. U.,（*Oeuvres complètes*, t. V,）pp. 328-370.）と『愛の新世界』における「奇癖論」ないし「愛の奇癖論」(N. M. A., pp. 382-400.）とのあいだには補完的な対応関係がみられることをここで指摘しておく。

22) UU.,（*Oeuvres complètes*, t. V), p. 344. ただし原表の題目は「奇怪な嗜好の累進階梯」である。ちなみに出現頻度の低さは，その「嗜好」の持主をみいだせる場所の距離的隔絶をしめすものである。なお，この表の最後の行の「Z 5全性格」の原語は "Z en peuta-omnitone" であり，この "peuta" は "penta" の誤記か。

概観しておこう。

フーリエによれば,「共感」は「同一性」の関係にある性格の人びとのあいだで成立し，さらに「対照性」の関係にある人びとのあいだでも成立するという。この「性格」にかんする「同一性」の関係とは，物質的ないし肉体に由来する情念を支配的情念とする性格同士，および精神的ないし魂に由来する情念を支配的情念とする性格同士の関係をさす。他方,「対照性」の関係とは，この肉体に由来する情念を支配的情念とする性格と魂に由来する情念を支配的情念とする性格との関係をさす。さらに注目すべきこととして，フーリエは，ある人が誰かとどちらか一方の関係にもとづいた共感を成立させたとき,「蝶蝶情念」に応じてその人は気晴らしに他方の関係にもとづいた共感を別の人と成立させることを欲するという。要するにフーリエは肉体と魂とを対照的なものと考え，一方の支配的な性格の持主相互において，また肉体の支配的な性格の持主と魂の支配的な性格の持主相互において共感が成立すると考えているわけである[23]。

さきの情念論からすれば，この肉体と魂の対照性は，肉体に由来する「感覚情念」と魂に由来する「集団情念」および「配分情念」とのあいだの関係として考えられるが，もうひとつ，すなわち「集団情念」のなかの「長調」情念と「短調」情念との関係としても考えられることを指摘しておこう。

性格分析にてらしていえば,「混合」の性格をべつにして,「単一性格」のうちの「感覚情念」のいずれかを支配的情念としてもつ性格は肉体的ないし物質的性格といえる。そして「2重性格」から「全性格」にいたる性格つまり「多重性格」の持主は魂の支配の強い精神的性格といえる。したがって「単一性格」の一部の性格と「多重性格」とが「対照性」の関係にあるといえよう。そしてさらにこの区分では「同一性」の関係しか成立しないはずの「多重性格」の内部においても,精神的なものないし魂主導の「長調」の性格と，物質的なものないしは肉体主導の「短調」の性格とが「対照性」の関係にあるといえよう。ともあれ以上の関係のなかでさまざまな「性格」の持主のあいだに共感が成立するのである。

II.　多婚の組織

ところで,「蝶蝶情念」という快楽の多様性をもとめる欲求が12情念のひとつに数えられていることからも推測できるように,フーリエは,もともと人間は多婚への傾向をもつと考えている[24]。他方，すでにみたように，12の情念のいずれかひとつでも抑圧されれば，これらの12情念はその「統一性」の「対立情念」である「利己主義」に転化する。そしてフーリエは，文明社会で法的ないし宗教的にさだめられた一夫一婦制は「集団情念」のなかの「恋愛」情念を抑圧するものと断じている。したがって「われわれは文明の機構のなかにいるかぎり，他のすべての情念と同様に恋愛は逆機構に，すなわち道徳的毛虫，虚偽，エゴイズム，すべての卑しい資質の状態に従属させられている」のである。フーリエは，文明の「恋愛」ないし婚姻制度のもたらす利己主義を「排他的所有の奇癖 (manie de possesion exclusive)」ととらえて[25]それを次のような寓話によって説明している。

まずナルシスとプシュケーという，美男美女とその二人に求愛する20人の女性と20人の男性がいると仮定しよう。その「プシュケーに求愛する20人の男たちのおのおのは彼女を享受することを望む。そして彼らのおのおのは，もし彼女が自分以外の19人の男に身をゆだねるならば，彼女が辱められることを望む。しかしなが

23) U. U., (*Oeuvres complètes*, t. V), pp. 315-316, cf. N. M. A., p. 214; Publication des manuscrits, vol. IV, (*Oeuvres complètes*, t. XI,) Paris, 1857-1858, p. 26.

24) N. M. A., pp. 29-30.

25) *Ibid.*, pp. 49-50.

らプシュケーの各求愛者は自分以外の求愛者よりすぐれたいかなる資格をもつというのか。彼らのおのおのは各人同じくらいプシュケーを愛している。彼らのおのおのは自分以外のものと平等であり，おそらくプシュケーを手に入れるための美しさ，功績，それに権利にかんしてすぐれているだろう。正義にしたがえば，彼女はある一人の求愛者のものになるのと同じように他の求愛者たちのものにならねばならないし，もし彼女が求愛者のすべてに同意すれば，彼女は20倍寛大になるだろうし，求愛者らは20倍不公正で唾棄すべきものになるだろう。」このことはナルシスに恋する女性20人の求愛者にかんしても同様である。つまりそれぞれ権利のうえでは完全に平等であるはずの求愛者のそれぞれが恋人を「もっぱら自分だけのものにしたい」のである。そして正義にもとづいてナルシスなりプシュケーが求愛者のすべてに平等に身をゆだねれば，その二人はたちまち侮辱されることになるのである。また求愛者の誰かひとりがナルシスなりプシュケーと結ばれることになれば，残りの求愛者たちは犠牲にならざるをえないのである。これが「文明人の正義」であって，「純粋の利己主義」の域を出ることができないのである[26]。

「しかしながらこの利己主義が，非常にしばしば自発的な分有（partage spontané）に転化する」ことをフーリエは観察している。この「自発的な分有」というのは配偶者をめぐる三角関係，夫と間夫による妻の分有であり，「不貞ないし間男とよばれる慣習」をさす。この慣習は文明社会においては卑しいものとされるが，フーリエはそこに人類の調和をもたらす胚種をみる。フーリエはさきの寓話の続きとしてこう書いている。もし「プシュケーがナルシスと結婚し，プシュケーが20人の求愛者のうちの一人にひそかに身をゆだねることに同意すれば，その求愛者はこのひそかな不実によってプシュケーを手に入れたことをとても幸福に思うだろうし，法律上の夫（＝ナルシス）を排除しようという考えなどみじんももたないだろう。それどころかその求愛者は，法律上の夫が自分とプシュケーを分有していることを十分承知していても，ナルシスを親切な行為で満足させてやるだろう。」間夫はプシュケーと密通しながら，彼女を意のままに享受できる立場にいる夫にたいして嫉妬しない。それどころか彼は彼女の夫にたいして親切心すら発揮している。だから間夫は「排他的所有の奇癖」から脱却して「分有」のきざしを示しているといえるわけである。フーリエは間男のこの部分に着目して，こう判断する。愛の利己主義すなわち「この排他的所有の奇癖は，だから，まったく変わりやすい嗜好（fantaisie）なのである。それは状況に応じて変容するものであって，けっして愛の幸福の不可欠の条件ではないのである」と[27]。

さらにフーリエは「排他的所有の奇癖」をこえて「分有」を現実化させているもうひとつの慣習に着目する。それは「誠実なブルジョワの至上の快楽」になっている「2組夫婦パーティー，3組夫婦パーティー，4組夫婦パーティー」というある種の乱行パーティーである。各人はひそかに逢い引きしてみんながねんごろになると，夫も夫人もみなそれぞれが自由に相手をかえて愛を営むのである。こうして彼らは「哲学の願いどおり兄弟のように，友人のように振る舞い，彼らのあいだではすべてが共有されるのである」。彼らは「この原理をまったく承認しようとしないのだが，それを実行はしているのである」。しかもそこでは「各人が隣人に譲ったのと同じだけのものを隣人から得ているのであって，平衡および保証され，均衡させられた平衡秤の哲学的規則に厳密に仕えているのである」。こうしてこれらのパーティーにおける肉体の「分有」は「排他的所有の奇癖」にかえて「交換の奇癖（manie des échanges）」を具現

26) *Loc. cit.*

27) *Ibid.*, p. 50.

していくのである[28]。とはいえ，文明社会におけるこうしたパーティーあるいは上流社会における乱行には肉体的な側面だけが支配的であって，精神的ないし感情的な側面については見るべきものはない。フーリエのめざすのは，あくまでも精神と肉体の両方の充足なのであって，したがってこのような文明社会の「分有」は組織さるべき多婚のシステムの胚種にすぎないのである[29]。

ではフーリエが構想する多婚のシステムとはどのようなものか。そのシステムの構想にあたってフーリエは，愛のエゴイズムすなわち「排他的所有の奇癖」を完全に否定せず，それを相対化して愛の形態一般のなかに組み込んでいく。さらに肉体中心の愛の営みを彼独特の仕方で多様化することによって集団的な精神的愛の形成を計っていくのである。そこでこの多婚の組織を検討してみることにしよう。

フーリエはまず，人びとは「超越的愛」すなわち「かけもち的な愛」と「利己的愛」すなわち「排他的な愛」とのふたつの形態の愛を「交互に」営むと考える。「超越的愛」とは「同時的に」複数の異性と愛の関係をもつ「かけもち的な愛」であり，「利己的な愛」とは一定期間もっぱらひとりの異性としか愛の関係をもたない「排他的な愛」である。フーリエは前者の愛を「魂の大いなる働き」とし，後者の愛を前者の愛の「気晴らし」あるいは「休息」ないし「愛の社交性の眠り」とみなしている[30]。そしてこれら二つの形態の愛の時間的配分および「超越的愛」を営むことができる相手の数をさきにみた「性格」の階梯に応じてつぎのように規定している［表4参照］。この表の「利己的愛の期間」,「超越的愛の期間」,「超越的愛の相手の数」をみると，「単一性格」は「利己的愛」に7/8年すなわち1年のほとんどをついやし，「超越的愛」の期間はそのわずかな残りである。しかもそのわずかな期間に「超越的愛」を1人の相手と営む。これとは対照的に，「全性格」は1年のほとんどをついやして8人の相手と「超越的愛」を営み，「利己的愛」を営むのはわずかの期間だけである。

フーリエによれば，「多重性格」はこの「利己的愛」と「超越的愛」の他にさらにもうひとつ，「機軸的愛」という形態の愛を営むと考えている。これは「たえざる不実をのりこえて一貫して維持される愛情」である。それをフーリエはこう説明している。「ある多重性格は，どれほど頻繁に愛する女性を交互に変えても，あるときは複数の女性をいちどきに，またあるときは一人の女性だけを排他的に愛しても，さらにいずれかの機軸の女性にたいして激しい情熱を維持する。その多重性格は彼女のところに周期的に戻って来るのである。それは永遠の魅力をもった女性なのである。そして彼女に対して彼は諸情念のうちでもっとも強い愛すらいだく。これらの諸情念は以前に交互に愛した馴染女たちにたいして彼を無頓着にさせる。この愛は彼にとってより高位の絆すなわち中心となる絆である。それは七色の光とその集合体である白色光との関係のように他の愛と融和する。だからこれは不貞，不実と同一化する複合貞節である。そしてこれはその資格で超越的貞節の名に値す

28) *Ibid.*, pp. 298-299.

29) *Ibid.*, p. 326.

30) *Ibid.*, pp. 279, 286-288. ちなみにフーリエは，このような「排他的な愛」と「かけもち的な愛」とを交互に営むのは「交互性の法則 (les lois de l'alternante)」すなわち「蝶蝶情念」のはたらきにもとづくとのべている (*ibid.*, p. 86)。他方，「交互性」ないし「交互運動」といえば，中村秀一氏がサン・シモンの思想をつらぬく鍵概念として着目されたものである。(中村秀一『産業と倫理—サン＝シモンの社会組織思想—』，平凡社，1989年。) 氏がその研究で明らかにしている「交互運動」とフーリエのいう「交互性の法則」とを比較してみると，両者とも交互的な動きをとらえるものではあるが，前者はマクロ的な運動をとらえたものであるとすると，後者はミクロ的なもの，自我の内部をとらえたものであるといえよう。こうした対照性はサン・シモンとフーリエを比較していくうえで注目すべき点のひとつであろう。

［表4］ 三種の愛の期間および相手の数[31]

性格階梯	利己的愛の期間	超越的愛の期間	超越的愛の相手の数	機軸愛の期間	機軸愛の相手の数
単一性格	7/8年	1/8年	1人	——	——
2重性格	1/2年	1/2年	2人	4年	2人
3重性格	1/3年	2/3年	3人	5年	3人
4重性格	1/4年	3/4年	4人	12年	4人
5重性格	1/5年	4/5年	5人	16年	5人
6重性格	1/6年	5/6年	6人	20年	6人
7重性格	1/7年	6/7年	7人	24年	7人
全性格	1/8年	7/8年	8人	28年	8人

［表5］ 対照的多重カドリール表[34]

中心；2つの支配的情念をもつ2重性格のクロリス：セラドニスム[35]と家族愛
中心；2つの支配的情念をもつ2重性格のテラモン：野心と友情
恋愛資格をもつ端役たち
性格のセッションに愛される単一性格ないし低音鍵盤
テラモンの情婦　A　支配的情念：セラドニー
テラモンの情婦　B　支配的情念：家族愛
クロリスの情夫　C　支配的情念：野心
クロリスの情夫　D　支配的情念：友情
7倍の期間におよぶ機軸のセッションで愛される機軸の多重性格ないし高音鍵盤
テラモンの情婦　V　2重性格　支配的情念：セラドニーと陰謀情念
テラモンの情婦　X　3重性格　支配的情念：家族愛と蝶蝶情念と複合情念
クロリスの情夫　Y　2重性格　支配的情念：野心と複合情念
クロリスの情夫　Z　3重性格　支配的情念：友情と蝶蝶情念と陰謀情念

る」[32]。この「機軸愛」にかんしても「超越的愛」と同様に，その愛の営まれる期間およびその相手にすることのできる人数が先の表のように規定されている。その数字によればこの「機軸愛」は，「利己的愛」や「超越的愛」と平行して，長い時間をかけて営まれる愛であるといえよう。

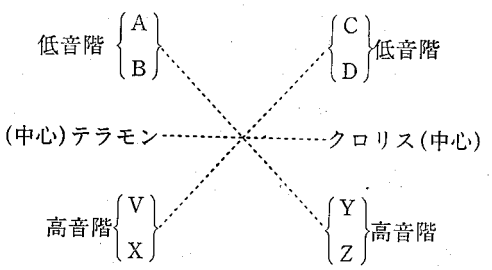
以上のような形態の愛を念頭においてフーリエは多婚の組織を構想している。彼は踊りの「カドリール」にたとえて，つぎのようなモデルによってその具体的イメージを提示している。そのモデルは「あまり数の多くない，そしてそれだけ説明の容易な2重性格」を中心にして合計10人の人びとから組織されるカドリールである[33]［表5参照］。

31) なおこの一覧表はつぎの箇所を参照して筆者がまとめたものである。*ibid.*, pp. 279, 286-288, 291-292.
32) *Ibid.*, pp. 291-292.
33) *Ibid.*, p. 303-304.
34) *Ibid.*, p. 304. この表のなかにみられるクロリスは女性の名前，テラモンは男性の名前である。
35) セラドニスムないしセラドニーにかんして，フーリエは，あるところで次のようにのべている。セラドニーとは「他の言葉でいえば“心のきずな(lien de coeur)”である。しかし“心の絆”では愛にかんしてはまったく曖昧である。物質的なものと精神的なものとの混同をさける名称が必要である。たとえば，物質的なものにかんしては医学と神学が“性交と肉交”の名称を採用している。私は前者を採用した。非常に稀でうさんくさい，純粋に精神的な愛のための特別な名称を人びとは知らないので，このような愛は，たしかに注目に値するようにはみえなかった。かつて人びとはこの愛を，物語のなかで“プラトン的愛およびセラドン的愛”とよんだ」(U. U., (*Oeuvres complètes*, t. IV), pp. 347-348, n. b.)。したがってセラドニーとは肉体的ないし性愛にたいする精神的な愛をさすことがわかる。

まず，このカドリールの中心に，2重性格の女性と男性がおかれる。すなわち支配的情念として，セラドニーと家族愛の二つの情念をもつクロリスと，支配的情念として，野心と友情の二つの情念をもつテラモンである。すでにみたように野心と友情とは長調情念であり，セラドニスムと家族愛とは短調情念である。そしてフーリエはこのクロリスとテラモンのもつ情念の組み合わせの関係を対照性の関係として規定している。この関係から共感が成立するはずなのである。

つぎにこのカドリールの端役として，つまり中心のクロリスとテラモンとが二つのセッションで相手にする人たちの性格が対照性の関係になるように規定される。まず性格のセッションで相手になる人として，テラモンの情婦Aと情婦Bは，それぞれ支配的情念としてセラドニーと家族愛をもつ。クロリスの情夫Cと情夫Dは，それぞれ支配的情念として野心と友情をもつ。つぎに機軸のセッションで中心の二人が相手にする人も，同様に対照性の関係になるように規定される。テラモンの情婦Vは2重性格で，その支配的情念はセラドニーと陰謀情念，情婦Xは3重性格で，その支配的情念は家族愛と蝶蝶情念と複合情念である。クロリスの情夫Yは2重性格で，その支配的情念は野心と複合情念，情夫Zは3重性格で，その支配的情念は友情と蝶蝶情念と陰謀情念である。ただしこの表においては，すべての人物が好みの年令の相手をもつということを仮定しておかねばならない[36]。

以上の性格配分は，フーリエの音階の比喩によって整理するとこうなる。すなわち中心のクロリスは低音階の情夫CとDと高音階の情夫YとZとで愛を営む。他方，中心のテラモンは低音階の情婦AとBと高音階の情婦VとXとで愛を営む。これら2つの音階，すなわちテラモンを中心とした音階とクロリスを中心とした音階とが結合されたもの，それがまさにこの対照的多重カドリール表なのである[37]。それを図式化してみると，こうなる。



以上のような枠組のなかで，テラモンの2人の情婦のAとBは，テラモンの支配的情念である友情と野心の情念を，クロリスの2人の機軸情夫YとZに，分割されたかたちでもつことができる。そしてAとBはYとZに愛着するようになる。またクロリスの2人の情夫のCとDは，クロリスの支配的情念であるセラドニーと家族の情念を，テラモンの2人の情婦VとXに，分割されたかたちでもつことができる。そしてCとDはVとXに愛着するようになる。さらにテラモンとクロリスもそれぞれの情念が対照性の関係にあって相互に情熱を抱くようになる。そうしてテラモンの機軸情婦と情婦からなる音階とクロリスの機軸情夫と情夫からなる音階とは交叉して，愛の営みの相手を交換していくのである。「交換は舞台のカドリールの旋回のようにあらゆる方向をとって継続する。しかしその交換は調和的交換だろう。そこでは，このような諸概念の関係にしたがって8人すべてが同時に一致して正確に結合しあうことになろう」[38]。

以上は2重性格を中心にしたカドリールの内容であるが，中心になる人の性格の段階が高度になるにしたがってその規模は大きくなってい

36) N. M. A., pp. 303-305.

37) *Loc. cit.*

38) *Ibid.*, p. 305.

く。フーリエによれば「他の多婚カドリールは全婚のカドリールにまで段階的に上昇していく。全婚は32人の人と4人の中心から構成される」[39]。

ともあれ多婚がこのようなかたちに組織されると，人びとの「恋愛」情念の肉体的な欲求と精神的な欲求は充足されて「配分情念」もみたされるはずなのである。

III. 共有幻想と分散相続

さて，「多重性格」はそれぞれ性格の段階と同じ数の「機軸」の異性と「機軸的愛」を営むということは，すでにみたとおりである。しかし「多重性格」はさらにもうひとり「超機軸」とよばれる相手をもつ[40]。この「超機軸」になれるのはある種の聖人であり，それは他の「機軸」一般とは違って「聖職」とみなされる。そして「多重性格」の人びととこの聖人との恋愛の関係は，カドリールを「聖なるもの (sainteté)」に接続する回路になるのである。この「聖職」は文明社会の売春制度をモデルにした「天使結合 (l'union angelique)」という独特な形態の愛の結合をおこなう「天使職 (angelicat)」とされる。この「天使職」につく男女は「天使」とよばれ，誰でもがなれるわけではない。「天使」はなによりもまず若く美しくなければならない。さらに「自己犠牲」を要するいくつかの「試練」に耐えねばならない。たとえばみずから「天使」になることを志願する美男美女は，まず「尊師」「尊者」「長老」とよばれる年配の人びとに「愛の貢物」を捧げねばならないのである。このような「試練」に耐えてはじめてその美男美女は「天使」になれるのである[41]。

では，このような「天使」が営む愛，すなわち「天使結合」とはどのようなものか。フーリエは，ナルシスとプシュケーという相思相愛の二人の「天使」を想定して，これを説明している。「二人はグニドでもっとも美しいカップルである。そして40人の求愛者の誰もが，男であれ女であれ，その二人が相思相愛であることに驚かないだろう。しかしもし，われわれの慣習ではまったく考えられない衝動によってプシュケーとナルシスが自分たちの20人の求愛者のおのおのに身をゆだねたあとではじめて結ばれるということに同意するならば，友の全体を満足させるために相互に禁欲するこの天使の二人の寛大な献身を認めよう。この行為は，気ままな売春が卑しいものであるのと同じほどに名誉あるものになる」と。つまり相思相愛の「天使」男女は，おのおの自分の求愛者たちに身をゆだねて「天使」同士の肉体的欲望を補償しながら「天使」たち自身の肉体的な結合をできるかぎり延期する。そうすることによって肉体的欲望をのりこえて「天使」たちは自分たちの愛を昇華させていくのである。フーリエはこうして昇華された愛を「超越的セラドニーないし純粋な愛の高い段階，ある種の心的エロティスム」とよび，それが「天使」に精神的な快楽をもたらすと考える。この快楽すなわち「感情的法悦 (extase sentimentale)」が「天使」のあいだでどのくらい持続されるのかは，「天使」の「性格の能力」と「情念の強さ」による。だが肉体的な交渉をもつやいなや，この二人は「天使職」を去らねばならない[42]。

「天使」が味わえる精神的な快楽がいまひとつある。それは「大衆の偶像崇拝の対象になる」快楽である。フーリエは，こう述べている。「天使のカップルのおのおのは，自分の選んだ好みの男ないし女につぎつぎと身をゆだねるのであるが，けっして肉体的感覚の快楽にかぎられず，この快楽とともに宗教的崇拝にねざした現実の熱狂を味わうだろう。この熱狂は，天使の相手たちが天使と結合した結果もたらされるもので

39) *Ibid.*, p. 303.
40) *Ibid.*, pp. 293, 295.
41) *Ibid.*, pp. 121-123.
42) *Ibid.*, pp. 53, 81, 92.

ある。また天使のカップルの二人自身はといえば，こうした働きのなかで互いに相手を神の像とみなして尊敬しあっているだろう」と。つまり「天使」は多数の求愛者と肉体的な関係をもつことによって感覚的な快楽を味わうばかりではなく，自分が人びとの宗教的崇拝の対象になることの快楽すなわち偶像になることの快楽も味わうのである[43]。

ともあれこの「天使結合」は「天使男女であれ，天使男女を所有する人たちであれ，彼らに高潔で神聖な陶酔を，崇高な逸楽を味わわせるだろう。この逸楽は，成人の愛の魅力が10才の腕白の遊びよりもまさっているのと同じくらい，現在の利己主義よりまさっている。」また「天使の一対の寵愛は，すべての恋するものにとって聖なるものの救済，愛の調和，宗教統一と神の精神における人間の嫉妬の吸収のしるしになるだろう」。このようにして人びとはシステマティックに組織された多婚を「聖なるもの」に接続することができるのである[44]。

以上，カドリールと天使結合からなる多婚のシステムをみてきたが，そこで形成される状況をフーリエはダンスの事例をひいてつぎのように述べている。

「16人の人びとがコントルダンスをするとき，その誰一人として動きに割り振られたタイミングをはずすことも自分たちの順番を変えることも望まないだろう。もしダンスが彼らの唯一の快楽であれば，彼らのおのおのが［指揮者に代わって指揮する第一バイオリン奏者の］弓の最初の一振りで動き出すことに注意を集中するのがみられるであろう。彼らは逆に全体の都合におうじて動きを合わせたり，遅らせたりすることに快楽を感じる。オーケストラが響き渡る部屋に各人がひとりぼっちにされるとき，その人はすぐに止まらずに踊れるだろうし，他の者の順番のために自分の動きを止めないで踊れるだろう。けれども，その人はコントルダンスのカドリールほどの満足を味わえないだろう。このカドリールでは，各自自分の動きを全体の都合に従わせることが強制されるのであるが[45]。」（［　］内は引用者による付加。）

多婚のカドリールにおいて相手の連続的な交換は，すでにみたように規則的に配分された性格の対照性にもとづいておこなわれる。そしてそれが円滑に進行していくためにはこの事例で説明されているような自己抑制が必要となる。しかしその抑制は必ず次の快楽の享受に通じ，しかもその次の快楽を倍化させるのである。だからこの抑制すなわち快楽の享受の延期はそれ自体が快楽となっていくのである。フーリエはさらにオーケストラの事例を使って次のように説明している。

「上のことはコンサートにおける演奏者についても同様である。すなわちポーズを取り，演奏を急いだりあるいは緩慢にしたりして，自分の意志を自分が隷従する気高い秩序のためにことごとく犠牲にすることを強いられるのである。いかなる方法にも従属させられることなしに変奏曲やアルペジオを弾くために，演奏者がただひとり自分の部屋にいれば得られるであろうよりもずっと多くの快楽を彼は得る。だから，調和して，あるいは全体が一致して展開される情念のあらゆる物質的な行使において，全体の利益のためにあらゆる活動を従属させることに，その活動を自由に孤立して行うことで得るであろうよりも多くの快楽をもつ。そしてこのジャンルの快楽は，享受そのものとは全く異なるものであるが，統一性の快楽である。これはその全発動において快楽を妨げ，従属させることによってその快楽を倍化する特質をもつ。しかしこの不愉快さは統一と［　　］との感情によって釣り合わされる。この統一の感情は従属ということにおおきな魅力をふりまき，従属そのものを現実的逸楽に転換する。なぜならその隷従は，全体の発展において支配する素晴らしい秩序の名誉を個人に帰することによっ

43) *Ibid.*, pp. 79, 92.
44) *Ibid.*, pp. 53, 80.
45) *Ibid.*, p. 314.

てその人の自尊心を喜ばせるからである[46]。」([ ]は原文空白。)

こうして「あらゆる集まりに付帯する快楽，すなわち全体の利益のために享楽の一部を犠牲にする快楽」が「統一性の快楽」として定義される。そして多婚のシステムのなかで人びとがこの快楽を追及しだすとき，そこに「ある種の宗教精神が支配する。彼らは自分たちの集団的結合を，神聖な結合ないし特別の性質の契約，あるいは愛とは非常に違った作用を生み出す結び付きとみなす。なぜならこの結び付きは嫉妬を吸収するからである」。フーリエはこの「宗教精神」を「共有精神 (l'esprit de communauté)」ないし「統一性すなわちすべての腹の通じたもののあいだの共有精神」として，文明人のもつ「憎しみや嫉妬はこの種の幻想にまったく適さない」とのべている[57]。

フーリエのいう共有幻想とは以上のようなものであったのである。そしてこの共有幻想こそ，富裕者の「気前の良さ」を喚起して貧者に金銭的な援助をおこなわせるためのもっとも有効な手だてであるとフーリエはみなしていた。しかし人びとの道徳的な不評をおそれて，彼みずからこの共有幻想にかんする説明を手控えたのであった[48]。『普遍統一の理論』につぎのような記述がある。「すでに予備的理論からもっとも興味ある部分，すなわち自由愛恋と愛の結集の部分を削除しなければならなかった。この部分は貪欲を吸収し，分有によって気前の良さつまり貧民を援助する富裕者の傾向を樹立するうえでもっとも強力な働きをするものである。富裕者は現在，貧民を略奪することしか考えていない」のである[49]。

では，富裕者はこの幻想にもとづいてその貧民にたいする気前の良さをどのように発揮するのか。「分散相続」ないし「遺産の分散」によってである。

すでにみたように，人びとはその性格の段階におうじて複数の相手と性的関係をもつ。ある相手は「機軸」として，また「交替」期間の相手として，さらには排他的関係を一定期間継続する相手として。このような関係の密度におうじてそれぞれの相手とは相互に愛し合ったあとも「強い混合愛」，「軽い混合愛」，「友情」といった「魅惑的な幻想」ないし「貴重な思い出」をそれぞれの相手と維持していく。そしてその当事者が富裕者である場合，彼はこれらの関係にもとづいて自分の相手になった人びとを分類し，自分の遺産相続人のリストにのせるのである[50]。

すでにみたように，この富裕者の性格の段階が高ければ高いほど，その富裕者が愛の関係をもった相手の数は多くなる。フーリエは女性資産家である「全性格のアルミテス」の場合についてつぎのようにのべている。「彼女は1200万の富をもっているが，その交替期の明細によると，しばしば一時に8つの情念を発動させているはずである。その結果，80才になる彼女は，過去400回の交替期に，彼女の情念管理をうけるほぼ40の渦巻き［＝ファランジュ］[51]において，約1200人の男と，約600人の女とを愛したことになる。そのすべてが，聖職や軍職との愛の交渉とは別になっている。……アルミテスは遺言に際して，1200万のうち300万という金額を，彼女の交替の男女の恋人のために残す(200万を友人たちに，300万を系列の策動家たちに，400万を親族に)。彼女は恋人たちを3等級に分け，第1級の750人には2000ずつ計150万を，第2級の600人には1600ずつ計96万を，第3級の450人には1200ずつ計54万を与える[52]。」([ ]内は引用

46) *Ibid.*, pp. 314-315.
47) *Ibid.*, pp. 302-303, 314-415.
48) 注1）参照。
49) U. U., (*Oeuvres complètes*, t. V), p. 501. cf. *ibid.*, pp. 464-466.
50) N. M. A., p. 294, cf. *ibid.*, pp. 310-311.
51) フーリエは「渦巻き」を「ファランジュ」と同義にもちいることがある。なお「ファランジュ」については，注4）参照。
52) *Ibid.*, p. 281, 巌谷訳，225ページ。『幻視者たち』(前掲書) 所収。なお，訳はこれによっていない。また引用文中においてアルテミスが「……約600人の女とを愛したことになる」というのは同性愛をさしている。

者による付加。）こうして彼女の遺産相続人のなかに彼女の血族以外の貧民も含まれることになる。

フーリエはこのような形態の遺産相続のありかたを「分散相続」ないし「遺産の分散」とよぶのである[53]。

他方，このようなかたちで富裕者の遺産を相続した貧民には，どのようなことが生じるのであろうか。文明社会においては貧民から絞り取ることしか考えない「富裕者にたいする現実の貧民の激しい憎悪は」，ここでは「崇拝するような愛情に，際限のない献身に転換される」のである[54]。

おわりに

さて，これまで詳細に検討してきた「共有」幻想の醸成とそれにもとづいた「分散相続」とは，すでに指摘しておいたように，『普遍統一の理論』からフーリエ自身が削除したものである。とはいえその削除は全面的なものではなく，「複合貞節」やそれが多くの遺産の相続機会をもたらすことなどの基本的な構図はすでにそこで言及されていた。ただし「天使職」については，その名称は記されてはいるものの，具体的な内容にかんしては見るべき説明はない[55]。けれどもフーリエが『普遍統一の理論』にのこした削除の痕跡から，われわれは，男女の共有幻想がフーリエの社会論においてどのような位置にあるのかを正確に知ることができる。最後に今一度この問題にふれておこう。

その削除の痕跡がのこされているのは『普遍統一の理論』，第4巻，第4部「情念均衡について」，第7篇「機軸的均衡について」，第9章「愛の結集の欠落」の箇所である[56]。この第7篇は，それにつづく第8篇の分配論の導入部になっている。ちなみにフーリエは富の分配を「もっとも重要な問題」とし，かつまた「その解決は学問的というよりもむしろ感情的なものであろう」とのべている[57]。さらに分配はたんにそれぞれの権利を満足させるだけではなく，貧者の「熱狂をかきたてることが必要である」と考えていた[58]。そしてこの第7篇と第8篇とで第4部が構成され，これが『普遍統一の理論』の最後に位置している。この第7篇では[59]，全体として，「集団情念」すなわち「友情」，「野心」，「家族」，「恋愛」の4つの情念の項目ごとに「反感をいだく人びとのあいだに共感の幻想をつくりだす技術」[60]について展開されている。その第7章では，快楽化された労働を介して富裕者が貧者の子弟と愛情の絆をはぐくみ，その子弟を自分の養子にすることが論じられ，第8章ではそのような絆にもとづいた「分散相続」が論じられている[61]。それに対応したかたちで第9章に愛の共有幻想とそれにもとづいた「分散相続」が書かれるはずであった。つまり多様化された性愛の組織が，快楽化された労働の組織とならんで，フーリエの構想した社会システムのなかに幻想を醸成する装置としてともに組み込まれるはずであったのである。

とすると，「分散相続」の基礎になる男女の共有幻想は，あくまでも貧者の富裕者にたいする熱狂的献身をひきだすような分配のありかたを説いた文脈でとらえることが妥当であることがわかる。こうした観点からのフーリエの幻想の操作への着目には，フランス・モラリスト流の人間観察の鋭さをみることができるが，それにしても愛の共有のみたようなかたちでの利用には底抜けの楽観があることもまた事実である。

ともあれ以上の分析によって，「男女の共有」の幻想が醸成される仕組みと，それにもとづいた富裕階級の貧困階級への資産の贈与のありかたが明らかになったであろう。

53) *Ibid.*, p. 272.
54) U. U., (*Oeuvres complètes*, t. V), pp. 509-510.
55) *Ibid.*, pp. 461-470.
56) *Loc. cit.*
57) *Ibid.*, p. 486.
58) *Ibid.*, p. 507.
59) *Ibid.*, p. 377 sq.
60) *Ibid.*, p. 382.
61) *Ibid.*, pp. 444-461.